平馬は困つたやうな顔をして、彦左衛門の待たしてあつた部屋へ戻つて來て、その前に兩手をつきました。

『扨て、大久保殿、御老體、わざわざお運び下さいまして、ありがたき幸せに存じますが、主人但馬にはお聞き及びでございませうが、非常に逆上致して居りますので、お逢ひ申し上げる儀は叶ひません、今日はお引き取りの儀をお願ひ申します』と云ふ平馬の挨拶です。

『はゝはア、左様か、逆上致して居ると申さるゝか、歸れと申さるゝか、左様ならば歸るでござらう、だが、平馬』と云つた時、彦左衛門の言葉は改まつてゐたのです。

『ヘエ』とばかりに平馬は頭をさげました。

『但馬は逆上してゐるのか。』



『ヘエ、左様でございまする。』

『しかと左様か。』

『左様でございます。』

平馬も弱つたに違ひありません。

『逆上とは狂人と云ふも同様、但馬殿には氣がふれたのか。』

『ヘエ……。』

『それは困つたことだ、武藝でも何でも同じこと、第一に心を練らなければならない、まだ但馬殿には心の練りかたが足りないと見えるな、さうではないか。』

『ヘエ……。』

『今度大和の山邊村の郷士中村市右衛門と云ふ寶藏院流の達人が江戸表へまかり出て、將軍の御前で日本一と云ふお賞めの御言葉を頂いたことは平馬は知つて

居るであらう、近日御前試合に於いて、市右衛門は但馬と槍劍の立ち會ひが仰せつかはされたのである、それを聞いて但馬が急に逆上して氣が變になつたとあらば、この病氣のもとは中村市右衛門から起つたことで、それは臆病と云ふ病氣だ、どうもこの臆病と云ふ病氣は心の練りかたが足らぬところから出て來る奴だ、この彦左衛門などは若年の昔から戰場萬馬の間を往來して來て心をしツかりと練つてゐる、但馬のやうな臆病武士はちつとこの彦左衛門の膽でも飲むといゝ、市右衛門の武名を聞いておぢ恐れて逆上して臆病を發するとは、但馬も呆れ返つた大白痴だ、何とも致しかたのない困つた者だ、武士が一番禁物としなければならないのはこの臆病と云ふ病氣である、さうではないか、平馬柳生の家に瑾がつく、そこに氣がつかないとは但馬も餘ッぽど馬鹿野郎だ、但馬は馬鹿野郎ぢア……』と、彦左衛門は大きな聲でどなり出したのでありま



す。

彦左衛門はもともと大きな聲の人でしたが、それが更に大きな聲を出してどなるのですから、その聲は自然と奥の居間で書物を讀んでゐた但馬守の耳にも這入らないわけにはゆきません。

『但馬の馬鹿野郎、平馬、お前の主人は馬鹿野郎だッ！』と彦左衛門は云つてゐるのです。

大道寺平馬も今は弱り果てたのです。

そこへ但馬守の小姓が出て來ました。

『はい、大久保樣に申し上げます』と云ふ口上です。

『何だ。』

『主人但馬儀、只今、病氣全快、お目通り致したいとのことでございます。御案

内申し上げるでございませう。』

『おゝ、但馬は病氣全快したと申すか、それはそれはありがたい、どうだ、平馬この彦左衛門は天下の英雄だぞ、英雄の膽は違つたものだ、のむには及ばない聲を聞いたばかりで忽ち病氣が癒つてしまつたではないか、さアさア、急いで案内をして呉れ。』

彦左衛門は子供のやうにニコニコ笑ひ乍ら、大手を振つて、やがて但馬守の居間へ通つたのであります。

二人とも久し振りの對面でした。

但馬守もニコニコ笑つてゐます。

座がきまると、それでも彦左衛門は流石に心配さうな顔をして但馬守の顔を見ました。



『病氣はいかゞでござる。』

『拙者は病氣などではござらぬ。』と云ふ但馬守の意外な挨拶であります。

彦左衛門はもう一度但馬守の顔を見ました。なる程、どう見ても病氣らしくはありません。

『病氣でないものを病氣と僞つて出仕を怠る、その罪決して輕からず……』と云ひかけたので、但馬守は、

『いや、拙者は病氣でござる』と云ふのです。

どちらがほんたうだかわかりません。

然し彦左衛門には但馬守の胎の裡がわかつてゐたのです。

『その病氣には何か理由があるでござらう。』

『不肖乍らこの但馬、將軍家劍道お手直し役を相勤める、中村市右衛門がたとへ

なに程の名人であらうとも、それがために病氣と上を僞つて引籠つて居る拙者ではござらぬ。』

『ウム、わしもさう思つてゐた、さア、この彦左衛門にお前さまの病氣の理由を何なりとも遠慮なく話して吳れ』と云ふ親切な言葉です。

『先き頃、出羽の上城へ流罪になつた澤庵禪師のこと、拙者若年の昔から昵懇にしてゐて兄弟同然、是れと云ふ罪もないに御痛しや、その身の流罪、一日も早く御赦免に相成るやう、それのみを思ひ案じて近頃拙者のこの病氣でござる』と、但馬守は始めて自分の本心を打ち明けました。

彦左衛門にはすぐと但馬守の氣持がわかつたのです。

『よろしい、萬事、この彦左衛門がのみこんだわい、が、但馬、すこしも遠慮はいらないから市右衛門を御前で打ち据えて吳れ、さうすれば早速にも拙者が澤



庵禪師御赦免の儀を取りはからひ申さう、屹度拙者がお受け合ひ申すでござらう。』

『それは千萬かたぢけない、ありがたくお禮申し上げる、然らば明日と云はず、早速今日病氣全快届を出して早々御前試合ひをいたすでござらう。』

『いや、さうなくてはならない、それでは但馬しッかりやんなさるがいゝ……』と、彦左衛門はいろいろと但馬守を勵まして歸りました。

將軍家では勿論御滿足でありました。

そこで十月十五日と云ふ日が双方へ御沙汰になつたのであります。

試合はいつものきまりで吹上御庭で行はれるのです。正面にはもとより二代將軍秀忠公の御座があります、傍らには酒井讃岐守、本多上野介、小出信濃守、青山大藏大輔、お側御用平岡主殿頭、奥御祐筆奥村主膳、大目付土岐下野守、御目

付水橋駿河守、諸役人一同が堂々と居流れてゐます。柳生但馬守、中村市右衛門は麻の上下をつけてそこへ進み出て御縁側に謹しんで控へてゐます。大久保彦左衛門は今日の試合係でありました。

この試合は見ものであつたに違ひありません。

一同は片唾を呑んで見物してゐます。

試合は始まりました。

暫らく睨み合つてゐました。が、但馬守にどう云ふ隙があつたのか、市右衛門は大喝一聲、エイッとばかりに突きかゝつて來ました、心得たりとひらりと體をかはしたのは流石に但馬守です。忽ち槍を拂ひのけて敵の手もとに飛び込まうとしました。早くもあとへ飛び退つたのが市右衛門です。

再びまた睨み合ひが始まつたのです。



が、この時、但馬守はエイッと氣合ひをかけました。大喝一聲です。

どうしたと云ふのでせう。

市右衛門は持つてゐた槍をカラリとそこへ投げ出しました。

『參つた』と云ふのです。

どちらが勝つたのでせう。

將軍秀忠公にもわからない、大久保彦左衛門にもわからない、もとより一同の者にも、打たれもせないのになぜ市右衛門が『參つた』と云つたのかそれがわからない。

彦左衛門は將軍の命を受けて、そのことを市右衛門に訊ねたのであります。

『御意でございます、最初拙者が但馬殿へ突きをいれましたがなかなかあッぱれの腕前、睨み合ひをして居りますうちに、唯今但馬殿がエイッと云ふ眞の氣合

ひ、はッと驚いて拙者の氣合ひが拔けました、そこを强情我慢に、拙者が突き掛けて行けば忽ち拙者は但馬殿のために打ち据えられるでありませう、とても勝つべき見込みがございませんから、見苦しき敗を取らざるうちに參つたと槍をそれへ捨てたのでございます、拙者は負けたに相違ございません』と云ふのです。

名人は負けたとは云へどこかに違つたところがあります。

秀忠公は勝つた但馬守をお賞めになつたのは勿論のことですが、負けた市右衞門もお賞めになつたのでありました。

『扨て、但馬、あつぱれな腕前、何なりとも汝が望み次第の褒美を取らせる故に望みの儀あらば速やかに申せ』との、將軍のありがたいお言葉です。

『恐れながら上のお言葉に從ひ、但馬、身を以つてお願ひがございます、先き頃



出羽の上城へ流罪を仰せつけられましたる大德寺住職澤庵禪師の御赦免仰せつけ下さいますれば、但馬、身に餘るありがたき幸せに存じます。』

將軍にもそれは心得ぬ願ひでした。

但馬守はもつと何とか望む願ひのものがあつてもいゝ筈です。

それへ進み出たのが大久保彦左衞門であります。

『あゝ賞むべき哉、但馬守、澤庵禪師は但馬守と親しい間柄でございます、兄弟同然でございます、殊に但馬守は澤庵禪師を師としてゐたのでございます、その友達であり師である澤庵禪師の流罪の身を案じて、但馬守はさき頃病氣で引籠り致してゐた程でございます、友儀を忘れない但馬守は誠に賞むべきでございます』と申し上げたのです。

秀忠公は早速その赦免を仰せ出されたのでありました。

早駕籠が出羽の上城へ走りました。

言ふまでもなく、それは澤庵禪師を江戸へ迎へ戻らす駕籠であつたのです。

澤庵禪師は江戸へ歸つて來ました。その翌日、但馬守は御禮言上のため御城内へまかり出たのであります。

但馬守とも澤庵禪師はひさびさの對面でありました。

寛永九年に二代將軍秀忠公は御他界なさいました。三代將軍は家光公です。この家光公がまたたいへんに澤庵禪師に歸依なされたのであります。

徳川三代の御世には、この家光と云ふ名將が現はれて、半治半亂の血腥い世の中が大磐石のやうに治まつたのでありました。



## 寛永御前試合

本多上野介はかねがね柳生但馬守の出世を惡んで居りました。

『何と、上野、當時武藝者は數多あるが、まづ武術は但馬を第一とする、但馬は武藝の名人ぢア……』と、口癖のやうに三代將軍家光公は言はれるのであります。

聞いてゐて本多上野介は何となく面白くありません。

『御意にございまする、但馬守宗矩は如何にも劍道あつぱれすぐれた武藝者でございまする』と云ふより外に仕樣がありません。

『但馬は達人ぢア』とのお賞めの言葉です。

『但馬守に御前試合を仰せつけになりましてはいかゞでございませう』と云ふ本多上野介には、この時、胎に一物を持つてゐたのです。

『予も左様思つては居るが、但馬を相手に出來る武藝者がゐないではないか。』

『御意でございます、が、斯う遊ばしてはいかゞでございませう、但馬が必ず勝つときまつて居りましては、どうも、試合も面白く見物出來ません、そこで、諸家より一人宛、劍道のすぐれた者を十人お召し出しになつて、十人一度に但馬に打つて掛らしましてはいかゞでございませう、然る時は但馬守の手練もまたひときわ妙技を極めることでございませう。』

『なる程それはよい思ひつきである』と云つて家光公もそれに賛成なさいました。

上野介も胎の裡ではたいへんによろこんだのであります。これではどんなことがあつても但馬守が負けるにきまつてゐると思つたからです。



但馬守は立派にそれを引き受けました。

十人が一人宛掛つて來ると云ふのではないのです。十人一緒にいち時に掛つて來るのです。その十人と云ふのは、

本多上野介家來一刀流の甘利彈生左衛門、同じく大島流槍術者大島玄蕃、松平和泉守家來神蔭流達人宮川左太夫、小出信濃守家來卜傳流劍術者横田八内、酒井左衛門尉家來無念流劍道達人岡本藤兵衛、細川越中守家來笹川勇之進、榊原式部小輔家來燒原兵六、大久保相模守家來關口七左衛門、井伊掃頭家來小林勘兵衛戸田采女正家來長谷川刑部。

右の十名でありました。

三月十五日と云ふその日もきまつたのであります。

それを聞いた大久保彦左衞門は非常に吃驚りしました。早速、木挽町の柳生但馬守の屋敷へやつて來ました。いろいろと心配してゐます。

『御老體、必ず御心配下さいますな、拙者も柳生但馬でござる、たとへ對手が十人二十人、よしんば三十人が一緒に掛つて來ませうとも、ものゝかずとは心得ませぬ、當日は見事打ち勝つて御覽に入れるでございませう、御老體、必ず御心配下さいますな』と云ふ立派な言葉です。

さうは云つて彦左衞門を歸へしはしたものゝ、但馬守には矢ッ張りそれは心配であつたのです。

或る日、但馬守は澤庵禪師を訪ねました。

『但馬、どうも血色がよくないやうではないか。』

澤庵禪師はすぐゝと但馬守の顏色に氣がついたのであります。



『いや、何事でもござらぬ』と但馬守は浮かぬ顏です。いつにない沈んだ聲でした。

『噂に聞けば十人の劍客者で御前試合をやるさうだな。』

『如何にも左樣でござる。』

『ウム』と云つて澤庵禪師は暫らく何事かを考へてゐましたが、澤庵禪師にもすぐゝと但馬守の顏色のすぐれないわけがわかつたと見えて、それとなく但馬守と禪の問答を始めたのです。

その問答をしてゐるうちに、但馬守の顏には次第に赤味を帶びた血の氣がのぼつて來るやうに見えました。

敵の働らきに心を置いてはいけない。

敵の太刀に心を置いてもいけない。

敵を打つと云ふところに心を置いてもいけない。
一心をわが太刀の上に置いてはどうであらう、が、それもいけないと澤庵禪師は云ふのです。
『然らば敵の構へに心を置けばよろしからう。』
『敵の構へに心を置けば、敵の構へに心を奪られて、自分の自由自在な働らきが出來ないであらう。』
『左様ならば心の置所がございません、置所のない心ならば人の身に心はいらないものでございませう』と但馬守は訊きました。
いろいろと六ケ敷しい問答があつたのです。
が、たうとう三月の十五日と云ふ日がまいりました。
左右正面の三方から、いづれも當代の武藝の達人十人がいッ時に但馬守に打つ



てかゝるのであります。
但馬守は餘りに落ち着き過ぎてゐました。
十人の敵も一人の敵も但馬守には同じだつたのです、身體にはすこしの隙もありません、流石に十人の達人もこれには驚きました、泰然として、まるで十人の敵を眼中に置いてゐないのです。
これは澤庵禪師から敎へられた心の置きどころでした。
暫らくの間は掛け聲ばかりで相方とも睨みあつてゐましたが、すると右手に控へて居りました關口七左衞門が木劒をもつて、大喝一聲、但馬守を眼がけて打ち込んで來ました、あッと云つたばかりです、一足うしろへ退るところを左の肩先をピシリと打たれてゐました、打つたのは但馬守です、あとは九人になりました
すかさず正面に控へてゐた長谷川刑部は大島流の槍を取つて但馬守の胸もとを眼

がけて突きかゝつて來ました、但馬守はひらりと身體をかはしました、槍は空を突きました、と見た時、『參つた』と云ふ一言、左の籠手を打つたのは但馬守です同時に小林勘兵衛、横田八内の二人は左右から、これも一喝一聲、但馬守の腦天くだけよとばかりに木太刀で打ち下しました……。

『今度こそ但馬守が負けたッ！』

さう思つたのは皆なの間違ひでした。

打ち下した木太刀の下を潜つて、但馬守は、一人は胴を一人は肩先を打ちつけたのです。

『參つた。』

『參つたッ！』

二人のそう云ふ聲も同時でした。



あとに殘つたのは六人です。

笹川勇之進、燒原平六、岡本藤兵衛などを打ち据えた但馬守の太刀先は眼に見えない程の早技でした。

あとに殘つたのは本多上野介の家來、甘利彈生左衛門、大島玄蕃の二人でした。

突き込んで來たのを引きはづし、手許に跳り込んで利腕を打たれて、ポロリッと槍を取り落されたのは彈生左衛門です。

『無念ッ！』

と、ばかりで、彈生左衛門は跳りかゝつて但馬守と引き組んだのです。

組まして置いてポロリとほどくと、但馬守の手は忽ち敵の襟髮に掛つてゐました。

『エイッ！』と一聲、

その時、彈生左衞門の大きな體は泉水の眞ん中でドブーンとばかりに水煙を立てゝゐました。泉水の中へ投げ込まれたのです。

『朋友の敵ッ！』

と、眞向ふから打ち込んで來たのは、大島玄蕃であります。

これも見事に但馬守に肩先を打たれました。

『無念ッ！』と云ふのさへ殘念です。

勝てないとは知り乍ら、これも木太刀を捨てゝ但馬守と引き組みました。

これもまた泉水の中へ投げ込まれたのであります。

斯うして但馬守は十人の劍客者に悉く打ち勝つたのでありました。

將軍のおよろこびは勿論のことです。

然しそばにゐた大久保彦左衞門のよろこびはどれ程だつたでせう。



彦左衞門は大喜びで縁側へ踊り出すと、手に持つてゐた扇をひらいて、頻りに但馬守を煽ぎたてるのであります。

『どうも無双の名人、柳生但馬、當時有名な武藝者を十人一時に引き受けて、盡くこれを打ち込むと云ふのは、實にどうも前代未聞のことぢア、後世またあるまぢきところぢア、天下無双、武藝の大名人、いや、彦左衞門感服致した、日本一の名人柳生但馬守、でかした但馬、あつぱれ手柄をいたした、いや、見事見事……』と、彦左衞門は餘りのうれしさに躍り出したのです。が、何と云つても老體のことです、無中になつて踊つたので、たうとう彦左衞門は縁を踏みはづして、お庭へストンとばかりに轉び落ちました。

この樣子を見て、一同の者も、どッと一時に思はず吹き出したのであります。

彦左衞門はムクムクと起きあがりました。そして言ふのです。

『……いや、どうも、但馬は日本一の名人ぢア、天下の名人ぢア、十人の武藝者をかたッぱしから打ち込んだのみならず、戰場萬馬を往來して未だ一度も不覺をとつたことのない天下の大豪傑大久保彦左衞門までを庭へつき落したのではないか、實に但馬は天下無双の名人ぢア。』

宮本武藏（終り）



少年國史文庫
宮本武藏

著者
森卷雄

檢印

昭和十四年十二月一日 印刷
昭和十四年十二月五日 發行

定價金六拾錢

著者 森卷雄
東京市神田區小川町二ノ十
發行者 湯淺修一
東京市神田區神保町三ノ二三
印刷者 塚田十五郎

東京市神田區小川町二ノ十
發行所 都祥閣
電話神田(25)二三七〇番

コトB-3

435
101

右や